



夢十夜

夏目漱石

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元にすわっていると、あおむきに寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、りんかくのやわらかなうりざねがおをその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、くちびるの色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはつきり云った。自分もたしかにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上からのぞき込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぼつちりと眼をあけた。大きなうるおいのある眼で、長いまつげに包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒なひとみの奥に、自分の姿があざやかに浮かんている。

自分はすきとおるほど深く見えるこの黒眼のつやを眺めて、これでも死ぬのかと思うた。それで、ねんごろに枕のそばへ口を付けて、死ぬんじやなかうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうにみはったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、わたしの顔が見えるかいといっしんに聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写つてるじやありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から

離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、うめて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星のかけをはかじるしに置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。またあいに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、

——あなた、待っていてられますか」

自分は黙ってうなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待つていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓のそばに坐って待つていて下さい。きつと逢いに来ますから」

自分はただ待つていると答えた。すると、黒いひとみのなかにあざやかに見えた自分の姿が、ぼうつとくずれて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じた。長いまつげの間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きなめらかなふちの

するどい貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差しきてきらきらした。しめった土のにおいもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星のかけの落ちたのを拾つて来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちてゐるまに、かどが取れてなめらかになったんだろうと思つた。だきあげて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分はこけの上に坐つた。これから百年の間こうして待つてゐるんだなと考えながら、腕組をして、丸いはいしを眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それがまた女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまままでのつと落ちて行つた。一つと自分はかんじようした。

しばらくするとまたからくれないのてんとうがのそりとのぼつて来た。そうして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、こけのはえた丸い石を眺めて、自分は女にだまされたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下からはずに自分の方へ向いて青いくきが伸びて来た。見る間に長くなつ

てちように自分の胸のあたりまで来て留まった。と思うと、すらりとゆらぐくのいただきに、心持首をかたふけていた細長い一輪のつぼみが、ふつくらとはなびらを開いた。真白なゆりが鼻の先で骨にこたえるほど匂った。そこへはるかの上から、ぼたりとつゆが落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露のしたたる、白いはなびらにせつぷんした。自分が百合から顔を離すひょうしに思わず、遠い空を見たら、あかつきの星がたった一つまたたいていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

第二夜

こんな夢を見た。

おしよりの室をさがつて、ろうかづたいに自分の部屋へ帰るとあんどろがぼんやりともっている。かたひざをざぶとんの上に突いて、灯心をかき立てたとき、花のようなちようじがぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなった。

ふすまのえはぶその筆である。黒い柳を濃く薄く、おちこちとかいて、さむそうな漁夫がかさをかたぶけて土手の上を通る。そこにはかいちゆうもんじゆのじくがかかつて、ひとけがない。黒いてんじように差すまるあんどろの丸い影が、あおむくとたんに生きてるように見えた。

たてひざをしたまま、左の手でざぶとんをめくつて、右を差し込んで見ると、思った所に、ちゃんとあつた。あれば安心だから、蒲団をもとのごとくなおして、その上にどっかりすわつた。

お前はさむらいである。侍なら悟れぬはずはなからうとおしよが云つた。そういうまでも悟れぬところをもつて見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間のくずじやと言つた。ははあ怒つたなと云つて笑つた。くやしければ悟つた証拠を持つて来いと

云つてふいとむこうをむいた。けしからん。

隣の広間の床にすえてある置時計が次のときを打つまでには、きつと悟つて見せる。悟つた上で、今夜またにゆうしつする。そうして和尚の首と悟りとひきかえにしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければじじんする。侍がはずかしめられて、生きてゐる訳には行かない。きれいに死んでしまふ。

こう考えた時、自分の手はまた思わずふとんの下へはいつた。そうしてしゅぎやの短刀をひきずり出した。ぐつとつかを握つて、赤い鞘を向へ払つたら、冷たいはが一度に暗い部屋で光つた。すごいものが手元から、すうすうと逃げて行くように思われる。そうして、ことごとくきつきさきへ集まつて、さつきを一点にこめている。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭のようにちぢめられて、くすんごぶの先へ来てやむをえずとがつてるのを見て、たちまちぐさりとやりたくなつた。からだの血が右の手首の方へ流れて来て、握つてゐる束がにちやにちやする。くちびるがふるえた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それからぜんがを組んだ。――じょうしゅう曰くむと。無とは何だ。くそばうずめとはがみをした。

奥歯を強くかみしめたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣つて痛い。眼は

普通の倍も大きく開けてやった。

かけものが見える。行灯が見える。たたみが見える。和尚のやかんあたまがありありと見える。わにぐちをあいてあざわらった声まで聞える。けしからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首にしなくてはならん。悟ってやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのにやつぱり線香のにおいがした。何だ線香のくせに。

自分はいきなりげんこつを固めて自分の頭をいやと云うほどなぐった。そうして奥歯をぎりぎりとかんだ。りようわきから汗が出る。背中が棒のようになった。ひざのつぎめが急に痛くなった。膝が折れたってどうあるものかと思った。けれども痛い。苦しい。むはなかなか出て来ない。出て来ると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常にくやしくなる。涙がほろほろ出る。ひとおもいに身をおおいわの上につけて、骨も肉もめちやめちやにくだいてしまいたくなる。

それでも我慢してじつと坐っていた。たえがたいほど切ないものを胸にいれて忍んでいた。その切ないものがからだ中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようとあせるけれども、どこも一面にふさがって、まるで出口がないような残酷極まる状態であった。

そのうちに頭が変になった。あんどともぶそのえも、畳も、ちがいだなも有って無いような、無くって有るように見えた。と云ってむはちつともげんぜんしない。ただい

いかげんに坐っていたようである。ところへこつぜん隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はっと思った。右の手をすぐ短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打った。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供をおぶってる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼がつぶれて、あおぼうずになっている。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるでおとなである。しかもたいとうだ。

左右はあおたである。みちは細い。さぎの影が時々やみに差す。

「たんぼへかかったね」と背中云った。

「どうして解る」と顔をうしろへ振り向けるようにして聞いたら、

「だつてさぎが鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少しこわくなった。こんなものをしょっていては、この先どうなるかわからない。どこかうつつやる所はなからうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出すとたんに、背中で、

「ふふん」と云う声をした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。ただ

「おとっさん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森をめじるしにあるいて行つた。田の中の路が不規則にうねってなかなか思うように出られない。しばらくするとふたまたになった。自分はまたの根に立つて、ちよつと休んだ。

「石が立つてるはずだがな」と小僧が云つた。

なるほど八寸角の石が腰ほどの高さに立っている。表には左りひヶくぼ、右ほつたはらとある。やみだのに赤い字があきらかに見えた。赤い字はいもりの腹のような色であつた。

「左が好いだらう」と小僧が命令した。左を見るとさっきの森が闇の影を、高い空から自分らの頭の上へなげかけていた。自分はちよつとちゅうちよした。

「遠慮しないでもいい」と小僧がまた云つた。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よくめくらのくせに何でも知つてゐるなと考えながら一筋道を森へ近づいてくると、背中では、「どうも盲目は不自由でいけないね」と云つた。

「だからおぶつてやるからいいじゃないか」

「負ぶってもらつてすまないが、どうも人に馬鹿にされていけない。親にまで馬鹿にされるからいけない」

何だかいやになった。早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——ちようどこんな晩だったな」と背中ではひとりごとのように云っている。

「何が」ときわどい声を出して聞いた。

「何がって、知つてるじゃないか」と子供はあざけるように答えた。すると何だか知つてるような気がし出した。けれどもはつきりとは分らない。ただこんな晩であつたように思える。そうしてもう少し行けば分るように思える。分つては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまつて、安心しなくつてはならないように思える。自分はますます足を早めた。

雨はさつきから降っている。路はだんだん暗くなる。ほとんど夢中である。ただ背中に小さい小僧がくっついていて、その小僧が自分の過去の過去、現在、未来をことごとく照して、寸分の事実ももらさない鏡のように光っている。しかもそれが自分の子である。そして盲目である。自分はたまたまなくなった。

「ここだ、ここだ。ちようどその杉の根の処だ」

雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は覺えず留つた。いつしか森の中へはいつてい

た。いっけんばかり先にある黒いものはたしかに小僧の云う通り杉の木と見えた。

「おとっさん、その杉の根の処だったね」

「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年たつとしよう」

なるほど文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今からちょうど百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、こつぜんとして頭の中に起った。おれはひとごろしであつたんだと始めて気がついたとたんに、背中の子が急に石地藏のように重くなった。

第四夜

広い土間の真中に涼み台のようなものをすえて、そのまわりに小さいしょうぎが並べである。台は黒光りに光っている。かたすみには四角なぜんを前に置いてじいさんが一人で酒を飲んでゐる。さかなは煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやしてしわと云うほどのものはどこにも見当たらない。ただ白いひげをありたけはやしているからとしよりと云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんだろうと思つた。ところへ裏のかけひからておけに水をくんで来たかみさんが、まえだれで手をふきながら、

「御爺さんはいくつかね」と聞いた。爺さんはほおばったにしめをのみ込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間にはさんで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんはちゃわんのような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髯の間から吹き出した。すると神さんが、

「御爺さんのうちはどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「へその奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間につつこんだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので

熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふうと吹いて、

「あっちへ行くよ」と云った。

「まっすぐかい」と紳さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、しょうじを通り越して柳の下を抜けて、かわらの方へまっすぐに行つた。

爺さんが表へ出た。自分もあとから出た。爺さんの腰に小さいひょうたんがぶら下がっている。肩から四角な箱をわきの下へ釣るしている。あさぎのももひきをはいて、浅黄のそでなしを着ている。たびだけが黄色い。何だか皮で作つた足袋のように見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄のてぬぐいを出した。それをかんじんのように細長くよつた。そうしてじびたの真中に置いた。それから手拭のまわりに、大きな丸い輪をかけた。しまいに肩にかけた箱の中からしんちゅうでこしらえたあめやのふえを出した。

「今にその手拭がへびになるから、見ておろう。見ておろう」とくりかえして云つた。

子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はいっこう動かなかつ

た。

爺さんは笛をびいびい吹いた。そうして輪の上を何遍も廻った。わらじをつまだてるように、拔足をするように、手拭に遠慮をするように、廻った。こわそうにも見えた。面白そうにもあった。

やがて爺さんは笛をびたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、ちよいとつまんで、ぽつとほうりこんだ。

「こうしておく、箱の中でへびになる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云いながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行つた。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでもついて行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。しまいには、

「今になる、蛇になる、

きつとなる、笛が鳴る、」

とうたいながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思つて、爺さんはざぶざぶ河の中へはいり出した。始めはひざぐらいの深さであったが、だんだん腰から、胸の方まで水につかつて見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行つた。そうしてひげも顔も頭もずきんもまるで見えなくなつてしまった。

自分は爺さんがむこうぎしへ上がった時に、蛇を見せるだろうと思つて、あしの鳴る所に立つて、たった一人いつまでも待つていた。けれども爺さんは、とうとう上がつて来なかつた。

第五夜

こんな夢を見た。

何でもよほど古い事で、かみよに近い昔と思われるが、自分がいくさをして運悪くまけたために、いけどりになって、敵の大将の前に引きすえられた。

その頃の人はみんな背が高かった。そうして、みんな長い髯をはやしていた。革の帯をしめて、それへ棒のようなつるぎを釣るしていた。弓はふじづるの太いのをそのまま用いたように見えた。うるしも塗ってなければみがきもかけてない。きわめてそぼくなものであった。

敵の大将は、弓の真中を右の手で握って、その弓を草の上へ突いて、さかがめを伏せたようなものの上に腰をかけていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右のまゆが太くつながつている。その頃かみそりと云うものは無論なかった。

自分ひとりこだから、腰をかける訳に行かない。草の上にあぐらをかいていた。足には大きなわらぐつをはいていた。この時代の藁沓は深いものであった。立つとひざがしらまで来た。そのはしの所はわらを少しあみのこして、房のように下げて、歩くとばらばら動くようにして、飾りとしていた。

大将はかがりびで自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣

で、とりこにはだれでも一応はこう聞いたものである。生きると答えると降参した意味で、死ぬと云うとくつぷくしないと言ふ事になる。自分はひとこと死ぬと答えた。大將は草の上に突いていた弓を向うへなげて、腰に釣るした棒のようなけんをするりと抜きかけた。それへ風になびいたかがりびが横から吹きつけた。自分は右の手をかえでのように開いて、たなごころを大將の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相図である。大將は太い剣をかちやりとさやに収めた。

その頃でも恋はあつた。自分は死ぬ前に一目思う女にあいたいと云つた。大將は夜が開けてとりが鳴くまでなら待つと云つた。鶏が鳴くまでに女をここへ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いても女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまう。

大將は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きなわらぐつを組み合わせたまま、草の上で女を待っている。夜はだんだんふける。

時々篝火がくずれる音がする。崩れるたびにうろたえたようにほのおが大將になだれかかる。真黒なまゆの下で、大將の眼がびかびかと光っている。すると誰やら来て、新しい枝をたくさん火の中へなげこんで行く。しばらくすると、火がばちばちと鳴る。くらやみをはじきかえすような勇ましい音であつた。

この時女は、裏のならの木につないである、白い馬を引き出した。たてがみを三度なでて高い背にひらりと飛び乗つた。くらないあぶみもないはだかうまであつた。長く

白い足で、ふとばらをけると、馬はいつさんにかけ出した。誰かが簞りをつぎたしたので、遠くの空が薄明るく見える。馬はこの明るいものをめがけて闇の中を飛んで来る。鼻から火の柱のような息を二本出して飛んで来る。それでも女は細い足でしきりなしに馬の腹をけている。馬はひづめの音が宙で鳴るほど早く飛んで来る。女の髪は吹流しのようにやみの中に尾をひいた。それでもまだかがりのある所まで来られない。

するとまつくらな道のはたで、たちまちこけこつこつという鶏の声がした。女は身をそらざまに、両手に握ったたづなをうんとひかえた。馬は前足のひづめを堅い岩の上にはっしときざま込んだ。

こけこつこつとにわとりがまたひとこえ鳴いた。

女はあつと云つて、しめた手綱を一度にゆるめた。馬はもろひざを折る。乗った人と共にまともへ前へのめつた。岩の下は深いふちであつた。

蹄のあとはいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴くまねをしたものはあまのじやくである。この蹄のあとの岩に刻みつけられている間、天探女は自分のかたきである。

第六夜

うんけいがごくじの山門でおうを刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりにげばひようをやつていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹がななめに山門のいらかを隠して、遠い青空までのびている。松の緑としゆぬりの門が互いにつり合つてみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端をめざわりにならないように、はすに切つて行つて、上になるほど幅を広く屋根までつきだしているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。そのうちでも車夫が一番多い。つじまちをして退屈だから立つてゐるに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云つてゐる。

「人間をこしらえるよりもよっぽど骨が折れるだろう」とも云つてゐる。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王をほるのかね。へえそうかね。わつしやまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえまずぜ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でもやまとだけのみことよりも強いんだつてえからね」と話

しかけた男もある。この男は尻をはしよって、帽子をかぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細とんじやくなくのみとつちを動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔のあたりをしきりにほりぬいて行く。

運慶は頭に小さいえぼしのようなものを乗せて、すおうだか何だかわからない大きなそでをせなかでくくっている。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ている。

しかし運慶の方では不思議とも奇体とも感じ得ない様子で一生懸命に彫っている。あおむいてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王とわれとあるのみと云う態度だ。あっぱれだ」と云ってほめ出した。

自分はこの言葉を面白いと思った。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。だいじぎいの妙境に達している」と云った。

運慶は今太いまゆをいっすんの高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒をたてに返すや否やは

すに、上から槌をうちおろした。堅い木をひとときざみにけずつて、厚いきくずが槌の声に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつびらいた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がつて来た。そのとうの入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念をさしはさんでおらんように見えた。

「よくああむぞうさに鑿を使って、思うようなまみえや鼻ができるものだな」と自分
はあんまり感心したからひとりごとのように言つた。するとさっきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中にうまつて
いるのを、のみとつちの力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなも
のだからけつして間違うはずはない」と云つた。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。はたしてそうなら誰にでも
できる事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王がほつてみたくなつたから見物をやめ
てさつそくうちへ歸つた。

道具箱からのみとかなづちを持ち出して、裏へ出て見ると、せんだつてのあらしで倒
れたかしを、まきにするつもりで、こびきにひかせた手頃なやつが、たくさん積んで
あつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよくほり始めて見たが、不幸にして、仁王は見当
らなかつた。その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかった。三番目のにも仁王はい

なかった。自分は積んである薪をかたっぱしから彫って見たが、どれもこれも仁王をかくしているのはなかった。ついに明治の木にはとうてい仁王はうまっていないものだとう悟った。それで運慶がきょうまで生きている理由もほぼ解った。

第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしのたえまなく黒いけぶりを吐いてなみを切って進んで行く。すさまじい音である。けれどもどこへ行くんだか分らない。ただ波の底からやけひばしのような太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらくかかっているかと思うと、いつの間にか大きな船を追い越して、先へ行ってしまう。そうして、しまいにはやけひばしのようにじゅつといつてまた波の底に沈んで行く。そのたんびにあおい波が遠くの向うで、すおうの色にわき返る。すると船はすさまじい音を立ててそのあとをおっかけて行く。けれども決して追つかない。

ある時自分は、船の男をつらまえて聞いて見た。

「この船は西へ行くんですか」

船の男はげんな顔をして、しばらく自分を見ていたが、やがて、

「なぜ」と問い返した。

「落ちて行く日を追かけるようだから」

船の男はからからと笑った。そうして向うの方へ行ってしまった。

「西へ行く日の、はては東か。それはほんまか。ひがし出る日の、おさとは西か。そ

れも本真か。身は波の上。かじまくら。流せ流せ」とはやしている。へさきへ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太いほづなをたぐつていた。

自分は大変心細くなった。いつおかへ上がれる事か分らない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただ黒いけぶりを吐いて波を切つて行く事だけはたしかである。その波はすこぶる広いものであった。さいげんもなくあおく見える。時にはむらさきにもなった。ただ船の動くまわりだけはいつでも真白にあわを吹いていた。自分は大変心細かった。こんな船にいるよりいつそ身を投げて死んでしまおうかと思つた。

のりあいはいくさんいた。たいていは異人のようであつた。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇つて船が揺れた時、一人の女がすすりよりかかつて、しきりに泣いていた。眼を拭くハンケチの色が白く見えた。しかしからだにはさらさのような洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がついた。

ある晩かんぱんの上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知つてゐるか尋ねた。自分はつまらないから死のうとさえ思つてゐる。天文学などを知る必要がない。黙つていた。するとその異人がきんぎゆうきゆうのいただきにあるしちせいの話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作つたものだと言つた。最後に自分に神を信仰するか尋ねた。自分は空を見て黙つていた。

或時サローンにはいったらではないしょうを着た若い女が向うむきになって、ピアノ

をひいていた。そのそばに背の高い立派な男が立つて、唱歌をうたっている。その口が大変大きく見えた。けれども二人は二人以外の事にはまるでとんじやくしていない様子であった。船に乗っている事さえ忘れていようであった。

自分はますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足がかんぱんを離れて、船と縁が切れたそのせつなに、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかったと思つた。けれども、もう遅い。自分はいやでも応でも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。しかしつかまえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足をちぢめても近づいて来る。水の色は黒かつた。

そのうち船は例の通り黒いけぶりを吐いて、通り過ぎてしまつた。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やつぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とをいだいて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。

第八夜

床屋の敷居をまたいだら、白い着物を着てかたまっていた三四人が、一度にいらっしやいと云った。

真中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方にあいて、残る二方に鏡がかつてゐる。鏡の数をかんじようしたら六つあつた。

自分はその一つの前へ来て腰をおろした。するとおしりがぶくりと云った。よほど坐りごちが好くできた椅子である。鏡には自分の顔が立派に映つた。顔のうしろには窓が見えた。それからちようばごうしがはすに見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通るおうらいの人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にかパナマの帽子を買つてかぶつてゐる。女もいつの間にこしらえたものやら。ちよつと解らない。双方とも得意のようであつた。よく女の顔を見ようと思つうちに通り過ぎてしまった。

とうふやがらつばを吹いて通つた。喇叭を口へあてがっているんで、ほつぺたがはちにさされたようにふくれていた。膨れたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。しょうがい蜂に螫されているように思う。

芸者が出た。まだおつくりをしていない。島田の根がゆるんで、何だか頭にしまりが

ない。顔も寝ぼけている。いろつやが気の毒なほど悪い。それでおじぎをして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分のうしろへ来て、はさみとくしを持って自分の頭を眺め出した。自分は薄いひげをひねって、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、なにも云わずに、手に持ったこはくいろのくしで軽く自分の頭をたたいた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちやきちやきと鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼をみはっていたが、鋏の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云つた。

「だんなは表の金魚売を御覧なすったか」

自分は見ないと云った。白い男はそれぎりで、しきりと鋏を鳴らしていた。すると突然大きな声であぶねえと云ったものがある。はっと眼を開けると、白い男のその下に自転車の輪が見えた。人力のかじぼうが見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなつた。鋏の音がちやきちやきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻って、耳の所をかり始めた。毛が前の方へ飛ばなくなったから、安心して眼を開けた。あわもちや、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこです。小さいきねをわざとうすへあてて、ひょうしを取って餅をついている。栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちよつと様子が見たい。けれども栗餅屋はけつして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。

自分はあるだけの視力で鏡のかどをのぞき込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒いまみえの濃いおおがらな女で、髪をいちようがえしにゆつて、くろじゆすのはんえりのかかったすあわせで、たてひぎのまま、さつのかんじようをしている。札は十円札らしい。女は長いまつげを伏せて薄いくちびるを結んで一生懸命に、札の数を讀んでいるが、その読み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行っても尽きる様子がない。ひぎの上に乗っているのはたかだか百枚ぐらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分はぼうぜんとしてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましょう」と云った。ちようどうまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、ちようばごうしの方をふり返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

だいを払って表へ出ると、かどぐちの左側に、こばんなりのおけが五つばかり並べて

あつて、その中に赤い金魚や、ふいりの金魚や、やせた金魚や、ふとつた金魚がたくさん入れてあつた。そうして金魚売がそのうしろにいた。金魚売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、ほおづえを突いて、じつとしている。騒がしいおうらいの活動にはほとんど心を留めていない。自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金魚売はちつとも動かなかつた。

第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にもいくさが起りそうに見える。焼け出されたはだかうまが、夜昼となく、屋敷のまわりをあれまわると、それを夜昼となくあしがるどもがひしめきながらおっかけているような心持がする。それでいて家のうちはしんと静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行つた。父がどこかへ行つたのは、月の出ていない夜中であつた。とこの上でわらじをはいて、黒いずきんをかぶつて、勝手口から出て行つた。その時母の持つていたばんぼりのひが暗いやみに細長く射して、いけがきの手前にある古いひのきを照らした。

父はそれきり歸つて来なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかつた。しばらくしてから「あつち」と答えるようになった。母が「いつ御歸り」と聞いてもやはり「あつち」と答えて笑つていた。その時は母も笑つた。そうして「今に御歸り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えてのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

夜になつて、あたりが静まると、母は帯をしめ直して、さめざやの短刀を帯の間へ差

して、子供を細帯で背中へしよって、そつとくぐりから出て行く。母はいつでもぞうりを穿いていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまう事もあった。

つちべいの続いている屋敷町を西へくだつて、だらだら坂をおりつくすと、大きなちようがある。この銀杏をめじるしに右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。

片側はたんぼで、片側はくまざさばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉のこだちになる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当たると、古い拝殿の階段の下に出る。ねずみいろに洗い出されたさいせんばこの上に、大きな鈴のひもがぶら下がって昼間見ると、その鈴のそばにはちまんぐうと云う額がかかっている。八の字が、はとが二羽向いあつたような書体にできているのが面白い。そのほかにもいろいろの額がある。たいていはかちゅうのものの射抜いたきんてきを、射抜いたものの名前に添えたのが多い。たまにはたちを納めたものもある。

鳥居をくぐると杉のこずえでいつでもふくろうが鳴いている。そうして、ひやめしぞうりの音がびちゃびちゃする。それが拝殿の前でやむと、母はまず鈴を鳴らしておいて、すぐにしゃがんでかしわでを打つ。たいていはこの時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考えでは、夫がさむらいであるから、弓矢の神のはちまんへ、こうやつて是非ないがんをかけたら、よもやきかれぬ道理はなからうといちずに思いつめている。

子供はよくこの鈴の音で眼をさまして、あたりを見ると真暗なものだから、急に背中
で泣き出す事がある。その時母は口の内では何か祈りながら、背を振ってあやそうとす
る。するとうまくなきやむ事もある。またますますはげしく泣き立てる事もある。いず
れにしても母は容易に立たない。

ひととおり夫の身の上を祈ってしまつと、今度は細帯を解いて、背中の子をずりおろ
すように、背中から前へ廻して、両手にだきながら拝殿をのぼつて行つて、「好い子だ
から、少しのま、待つておいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へすりつける。そうし
て細帯を長くして、子供をしばつておいて、その片端を拝殿のらんかんにくりつけ
る。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往つたり来たりおひやくどを踏む。

拝殿にくくりつけられた子は、くらやみの中で、細帯のたけのゆるす限り、広縁の上
をはい廻っている。そう云う時は母にとつて、はなはだらくな夜である。けれどもし
ばった子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大
変息が切れる。仕方のない時は、中途で拝殿へあがつて来て、いろいろすかしておい
て、また御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が氣をもんで、よの目も寝ずに心配していた父は、とく
の昔にろうしのために殺されていたのである。

こんなかなしい話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女にさらわれてから七日目の晩にふらりと帰つて来て、急に熱が出てどつと、床についていると云つてけんさんが知らせに来た。

庄太郎は町内一のこうだんしで、しごく善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子をかぶつて、夕方になるとみずがしやの店先へ腰をかけて、おうらいの女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往來を見ないで水菓子を見ている。水菓子にはいろいろある。すいみつとうや、りんごや、びわや、バナナをきれいかごに盛つて、すぐみやげものに持つて行けるように二列に並べてある。庄太郎はこの籠を見てはきれいだと思つている。商売をするなら水菓子屋に限ると云っている。そのくせ自分はパナマの帽子を被つてぶらぶら遊んでいる。

この色がいいと云つて、なつみかんなどを品評する事もある。けれども、かつてぜに出して水菓子を買つた事がない。ただでは無論食わない。色ばかりほめてゐる。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立つた。身分のある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の氣に入つた。その上庄太郎は大変女の顔に感心し

てしまった。そこで大事なパナマの帽子をとつていねいにあいさつをしたら、女はかごづめの一番大きいのをさして、これを下さいと云うんで、庄太郎はすぐその籠を取つて渡した。すると女はそれをちよつとさげて見て、大変重い事と云つた。

庄太郎は元来ひまじんの上に、すこぶるきさくな男だから、ではお宅まで持つて参りましょうと云つて、女といつしよに水菓子屋を出た。それぎり帰つて来なかつた。

いかな庄太郎でも、あんまりのんき過ぎる。ただごとじゃ無からうと云つて、親類や友達が騒ぎ出していると、七日目の晩になつて、ふらりと歸つて来た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さんどこへ行つていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗つて山へ行つたんだと答えた。

何でもよほど長い電車に違いない。庄太郎の云うところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうである。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかりはえていた。女といつしよに草の上を歩いて行くと、急にきりぎしのてっぺんへ出た。その時女が庄太郎に、ここから飛び込んで御覧なさいと云つた。底をのぞいて見ると、きりぎしは見えるが底は見えない。庄太郎はまたパナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切つて飛び込まなければ、ぶたになめられますが好うござんすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門がだいきらいだった。けれども命にはかえられないと思つて、やつぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎

は仕方なしに、持っていた細いびんろうじゆのステッキで、豚のはなづらをぶった。豚はぐうと云いながら、ころりとひっくりかえつて、絶壁の下へ落ちて行つた。庄太郎はほつとひといきついである。とまた一匹の豚が大きな鼻を庄太郎にすりつけに來た。庄太郎はやむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いてまたまっさかさまに穴の底へころげ込んだ。するとまた一匹あらわれた。この時庄太郎はふと気がついて、向うを見ると、はるかかの青草原の尽きるあたりから幾万匹か数え切れぬ豚が、むれをなして一直線に、この絶壁の上に立っている庄太郎をめがけて鼻を鳴らしてくる。庄太郎はしんから恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ってくる豚の鼻頭を、一つ一つていねいに檳榔樹の洋杖で打っていた。不思議な事に洋杖が鼻へさわりさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。のぞいて見ると底の見えない絶壁を、さかさになった豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながらこわくなった。けれども豚は続々くる。黒雲に足がはえて、青草を踏み分けるような勢いでむじんぞうに鼻を鳴らしてくる。

庄太郎は必死の勇をふるつて、豚の鼻頭をなのかむばんたいた。けれども、とうとう精根が尽きて、手がこんにやくのように弱つて、しまいに豚になめられてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。

健さんは、庄太郎の話をここまでして、だからあんまり女を見るのはよくないよと

云った。自分ももつともだと思った。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰いた
いと云っていた。

庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。